[第46回]

能美防災株式会社

代表取締役社長　**岡村　武士** 氏

誰もが安心して暮らせる社会を実現する
～「期待の先」にある安全を「カタチ」に～

能美防災株式会社は、1916年の創立から100年を超える歴史を持つ防災事業のパイオニアであり、自動火災報知設備や消火設備などで日本を代表する総合防災メーカーです。
創業者の能美輝一（のうみてるいち）氏は元々貿易商を営んでおられましたが、1923年9月の関東大震災に伴う火災による死者数万人という惨状を目の当たりにし、火事の威力がいかに大きいかと驚くと同時に、ほとんどの人が防災に関心を寄せないことに対してひそかに義憤を感じ、従来の消火機能重視から転換して予防措置を講ずる必要性を強く意識し、数々の困難を乗り越えて、自動火災報知機の普及啓発などに尽力されました。
今回のインタビューでは、創業者の「災害から人々の生命・財産を守る」という精神を引き継ぎつつ、火災災害のみならず、豪雨水害や地震災害などあらゆる災害に対処する総合防災企業を目指す能美防災株式会社の経営戦略について、岡村武士様から、じっくりお話を伺いました。

1世紀を超える歴史を誇る防災事業のパイオニア

── 創業者の能美輝一氏は、元々大阪で貿易商を営んでおられた方で、おそらく防災にはあまり精通されていなかったのではないかと思うのですが、「人々の暮らしを火災から守りたい」という信念と高い志から、自動火災報知機の普及に努めてこられたのだと思いました。こうした創業者の精神は、現在の能美防災株式会社にも受け継がれていると思うのですが、いかがでしょうか。

岡村　創業者の能美輝一は、「自叙」という自伝を残しているのですが、東京本所横網町の陸軍被服しょう跡地における惨状を見て、「4万人もの方々がこの狭い地域において火災旋風により瞬時にして亡くなられましたが、これは地震のためではなく火事のためであり、すなわち火事の威力がいかに大きいかと驚くと同時に、その火事を防ぐことの必要性は、国民生活と直結した日々の重要

課題であるので、ひそかに義憤を感ずると同時に直ちに火事の研究に乗り出すことを決心した。」と書いています。そういった創業者の精神は脈々と受け継がれております。以前、当社では、社内に「能美平成維新塾」という勉強会を設け、そこでも創業者の志を学び、受け継ぐべく活動を行っておりました。

江戸時代以来、日本の消防は延焼を防ぐための破壊消防中心でしたが、火災の予防に重点を移すべきである、との信念の下、貿易商のノウハウを利用して海外の状況を調査し、英国の火災報知技術を知り、その特許を譲り受け、自動火災報知機による防災事業をスタートさせました。事業開始当初は、世間では防火の必要性に対する意識が低く、本当に苦労の連続でしたが、戦後、消防法と消防法施行令が施行され、ようやく火災報知設備と消火設備の重要性が認められるようになりました。そこに至るまでの苦労は、我々が想像もできないようなレベルのものだったと思います。

時代の流れの中で建物も複雑かつ大規模化し、火災も進化します。例えば、脱炭素化で水素やアンモニアなど新たなクリーンエネルギーの活用が注目されておりますが、防災についても新たな取り組みは必要不可欠となります。我々は、常に時代を先んじて研究開発を行い、新たな状況に対応できる製品やシステムを開発し続けようと心がけています。こうした精神は、創業者の能美輝一から受け継いできているものだと思っています。

進化を続ける防火システム

── 御社のWEBサイトを見ると、大型のビルや工場やトンネルなどのインフラから一般住宅まで、大小様々な構築物を対象とするとともに、火災だけでなく様々な災害に対応するための製品やサービスを提供されています。まず始めに、創業以来の事業分野である防火関連のお話をお聞かせいただけますか。

岡村　まずは、例えば創業以来の当社の主力製品である火災報知設備です

ドローンを活用した煙感知器の加煙試験器を開発

が、建造物の規模に合わせ、中・大規模用建物向けのR型防災システムや一般的なビル向けのP型自動火災報知設備、あるいは一般家庭向けの住宅用火災警報器まで様々な製品とサービスを幅広く提供しております。当社は、お客様目線で「分かりやすく、使いやすい」システムを目指しており、最新の『進PⅣ』型自動火災報知設備を例にとって申し上げれば、グラフィック液晶画面で視認性・操作性を向上させました。さらに、自動試験機能を付与させることにより、感知器の機能を常時チェックし安全性を大幅に向上させることで、半年に1回人手に頼っていた加熱・加煙試験が免除されています。

また、アトリウムなど高い天井に設置された煙感知器については、新たにドローン技術を活用した加煙試験器を開発し、業界初となる「日本消防設備安全センターの性能評定」を取得しました。作業の効率化が実現できます。他にも、様々な用途に、消火設備を含め最適な防災システムを提供させていただいております。

── どの業界でも人手不足が課題となっている中で、御社の新製品・新規サービスは、その解決にも寄与しますね。

ところで、御社が環境に配慮した泡消火薬剤を開発したという記事を見たのですが、これについてご説明いただけますか。

岡村　有機フッ素化合物（PFAS）を含まない泡消火薬剤のことですね。PFASは、水に溶けやすく、撥水性、熱に強いなどの性質があるため、泡消火薬剤のほか、焦げ付きにくいフライパンや防水衣類、塗料など、私たちの生活の身近なところで幅広く使われてきました。ところが、近年、PFASは自然分解されにくいため、長期間にわたり環境に蓄積されることによって土壌、水質、生態系への悪影響が指摘されています。従来、工場や危険物施設などの油火災が想定される環境では、当社の高発泡消火設備（パーフェックス；Perf-Ex）はPFAS含有の水成膜泡消火薬剤を用いなければ、十分な発泡性能や消火性能を確保できませんでした。そこで、当社は、長年蓄積した泡消火技術を駆使し、PFAS不使用でありながら、高い発泡性能や消火性能を持った泡消火薬剤の開発に成功しました。従来からサステナビリティやSDGsを重視しており、こうした製品の開発もその一環と言えます。

── 火災報知システムをはじめ、様々なハードウェアのご説明を頂きましたが、ソフト面などのサービスで御社ならではものはあるでしょうか。

岡村　火災や地震などの非常時における的確な対応をサポートする防災支援システム『TASKis®』（タスキス；task information system）があります。やる

高発泡消火設備（Perf-Ex: パーフェックス）実大実験

今春リリース予定の“地震・津波臨場体験 VR～命をつなぐ選択～”

べきこと「タスク」と連携をイメージする「たすき」を掛け合わせてネーミングしました。「自衛消防隊員」といった役割が与えられている人も、実際に火災や地震が発生した場合には、パニックとなり、何をしていいかわからず右往左往する、ということが起こりえます。TASKis®は、防火管理のソフト面にアプローチすることで、防災の知識や経験が少ない方でも有事に迅速かつ的確な対応ができるようサポートします。TASKis®を導入すると、火災発生時には、あらかじめ自衛消防隊員のスマートフォンにこのアプリがインストールされていることでPush通知が送信され、発生場所や状況を即座に把握できるようになります。また、初期消火や避難誘導などの具体的な行動指示がスマートフォンに表示されます。さらに平常時には、自動火災報知設備を動作させなくても本格的な簡易防災訓練が行えるので、通常業務への影響を最小限に抑えつつ、包括的な訓練が可能となります。

また、形骸化しがちな避難訓練や防災教育を活性化するための教材として、ゲームソフトウェア制作会社の株式会社グランゼーラ様と協力して、仮想空間内でリアルな災害体験ができる「火災臨場体験VR」を制作しました。既に７千人以上の方に体験していただいております。細部まで作り込んだ仮想空間と徹底した災害事象の描写に加え、リアルに動きながら様々なセリフを発する人が多数登場する災害体験によって、体験者に危機感を醸成します。火災の続編として地震・津波版を近々リリースする予定となっており、さらに、山梨県の公募に応募し、火山災害版の制作も進めています。

幼少のお子様には、ゲームで楽しく防災を学べるオリジナルコンテンツ『めざせ！ぼうさいマスター！』を、知育アプリ「ごっこランド」に提供しています。

当社は、火災のみならず、豪雨水害や地震災害など、あらゆる災害に関し、「安全・安心」を提供していきたいと考えています。

あらゆる災害に備えて

── 御社のWEBサイトを見ると、火災だけでなく様々な災害に対処する製品やサービスを提供されていることが分かります。そうしたもののいくつかをご紹介いただきたい、と思います。

岡村　まず、災害備蓄品に関する事業についてご説明したいと思います。当社では、災害備蓄品の販売を行っています。個人の机や衣装ロッカーにコンパクトに収納できる災害備蓄品セット（しのげールⅡ）などです。こうした災害備蓄品を購入されたお客様から、「食料品や飲料は、賞味期限が来た際に、処分に手間がかかる」というお話を頂戴しました。そこで始めたのが、業務効率化と社会貢献の両立を実現する備蓄品の入れ替え及び寄付サポートサービス「ストクル＋（プラス）」です。新規納入品の購入手続きから、寄付におけるNPO（フードバンク）団体様などとの調整・契約手続き及び配送手続きまでを、全て当社で行います。企業担当者様の手間を大幅に削減するとともに、廃棄コストとほぼ同等の費用で備蓄食品を寄付することができ、企業イメージの向上にも寄与します。

── 避難所開設作業の利便性向上を目的としたアプリを開発中、との記事も読みました。

岡村　NHOPS（エヌ・ホップス；Neighborly Help Operation System）ですね。近年災害は増加しており、避難所を開設する機会も増えています。当社では、今まで100以上の自治体や関連団体にインタビューを行い、その結果、現場で作業する自治体職員や地元住民の中に、「マニュアルだけでは、実際に災害が起こった際に避難所を開設できるか不安」という意見がかなりあることが分かりました。そこで、当社では、避難所の開設と運営を支援するウェブアプリNHOPSを開発中であり、

岡村　武士（おかむら　たけし）

1959年兵庫県に生まれる。
1983年東京経済大学経営学部卒業後、同年能美防災株式会社（旧能美防災工業株式会社）に入社。経営企画室長などを経て、2015年取締役就任、2017年常務取締役、2019年専務取締役、2020年取締役専務執行役員を歴任。2021年6月代表取締役社長に就任。現在に至る。

現在、いくつかの自治体と実証実験を行っています。このアプリを用いれば、スマートフォン上に開設や運営に必要な行動がシンプルに分かりやすく表示されるため、誰でも簡単に避難所の開設や運営ができるようになります。

「期待の先をカタチに」

──様々な製品やサービスを提供されていることが分かりましたが、これからの御社の発展の方向をどのようにお考えですか。

岡村　当社は、2019年度から2028年度までの「中長期ビジョン2028」という中長期経営計画を立ち上げ、4年目のステージⅡで「期待の先をカタチに」というロゴを作り、名刺にも載せました。その趣旨は、お客様や取引先の皆様のお困り事を探りその解決を図る新たな製品やサービスをカタチにしていこうという取り組みを表しています。また、社内ではちょっとしたアイデアを提出してもらう「期待の先ボックス」というものも設けています。それを踏まえて、「お客様の期待の先を行く」製品やサービスを開発し提供していきたいと考えています。

そのためには、お客様の声に真摯に耳を傾け、期待の先を感じ取る洞察力を磨きながら探究心を持ってコミュニケーションを図ることが大事ですし、様々な知識の習得や資格の取得も必要です。その意味で、当社の社員には、いろいろなスキルを学べる機会を提供し、人材育成を図っています。社員は真面目に当社の将来を考えており、それを真摯に受け止め、前向きに取り組んでいきたいと思っています。

座右の銘は「泰然自若でありたい」

──ここで、岡村様ご自身のことをお伺いしたいと思います。岡村様は、座右の銘や愛読書といったものをお持ちですか。

岡村　社長就任の際に、木村敞一　元名誉顧問から、「泰然自若で頑張りなさい」と言われまして、社長たるもの「泰然自若」を座右の銘にしようと思ったのですが、なかなか常に冷静沈着、どっしりと構えているのは難しいものです。したがって「泰然自若でありたい」というところでしょうか。愛読書は、歴史小説。小説ではありませんが、池田貴将さんが書かれた『覚悟の磨き方　超訳吉田松陰』は幕末の志士・吉田松陰の語録を現代語に直したもので、気持ちが高ぶるようなフレーズがたくさんあり、気持ちが前向きに熱くなり感銘を受けました。

──本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

インタビュア後記

今回のインタビューは、能美防災株式会社様の製品が展示されているスペースで実施しましたが、実に数多くの製品やサービスがあることに感銘を受けました。このインタビューでご紹介した製品やサービス以外にも、文化財防災システム、医療・福祉施設向け防災システム、一戸建て住宅・マンション向け防災システム、情報インフラ施設防災システムなど、数多くの防災システムを手がけておられます。まさに「総合防災メーカー」であると感じました。

全ての企業は、社会で必要とされる製品やサービスを提供されておられますが、特に能美防災株式会社様に関しては、「人々の安全安心」という社会の根幹を支える公共性の高い仕事だと思いました。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一

企業データ

社　　名：能美防災株式会社
事業内容：防災設備や防災機器の開発、製造、販売、施工、メンテナンス
設　　立：1944年5月（創立1916年12月）
所 在 地：東京都千代田区九段南4丁目7番3号
従業員数：2,766名（2024年3月）
ホームページ：https://www.nohmi.co.jp/